

開かれた大学の開かれた専門図書館 —筑波大学図書館情報学図書館

気 谷 陽 子 (筑波大学附属図書館情報サービス課主任専門職員図書館情報学図書館担当)

1. はじめに

筑波大学図書館情報学図書館(以下、当館あるいは図情図書館)は、体育・芸術図書館、医学図書館、大塚図書館とともに、4つの専門図書館のひとつです。筑波大学附属図書館は、昭和48(1973)年の開学以来、集中管理体制をとっており、中央図書館と4つの専門図書館が同じ仕組みで運営されています。当館は、平成14(2002)年10月に、旧図書館情報大学(以下、前身校や前身機関に冠する旧の記載を省略)が筑波大学と統合したことにより、現在の形になりました。図書館情報学分野の専門図書館として、学内外に文献資料を提供しています。以下に、当館の沿革、施設、蔵書についてご紹介します。

2. 沿革

2.1 教習所から図書館短期大学まで

日本の司書養成教育は、日本文庫協会によって明治36(1903)年6月に開催された第一回図書館職員講習会が嚆矢とされています。その後、常設の専門教育機関の設立を求める運動が展開されて、ようやく大正10(1921)年6月に文部省図書館員教習所(以下、教習所)が東京美術学校(現、東京芸術大学)の構内に設立されました。これが現在の筑波大学図書館情報メディア研究科に繋がっており、来年、平成23(2011)年は創基90周年を迎えます¹⁾。

教習所は、大正11(1922)年4月、帝国図書館附設となり、帝国図書館の一部に移転しました。大正14(1925)年3月に教習所は文部省図書館員講習所(以下、講習所)と改称され、昭和2(1927)年9月に帝国図書館(上野)に隣接する新校舎が落成しました。講習所の入学式は帝国図書館の閲覧室で行なわれ、帝国図書館の特別閲覧のパスが交付されたそうです²⁾。

講習所は、昭和20(1945)年3月に一時閉鎖されるまで続き、戦後、昭和22(1947)年5月に、帝国図書館附属図書館職員養成所として再設置されました。昭和24(1949)年4月に文部省に移管され、文部省図書館職員養成所(以下、養成所)と改称されました。養成所の大学昇格を求める運動が行なわれ、昭和39(1964)年4月に図書館短期大学(以下、短大)が設置されました。同年12月、短大は世田谷区下馬に移転しました。

短大になってからも、大学昇格運動に引き続き、四年制への移行が課題とされていました。短大の発足から3年後の昭和42(1967)年9月に、筑波研究学園都市に移転する機関の候補にあげられ、昭和54(1979)年10月に図書館短期大学の発展的解消により、図書館情報大学がつくばの地に開学しました³⁾。

2.2 図書館情報大学

昭和54(1979)年11月、現在のつくば市春日に校舎棟が完成し、昭和55(1980)年4月に104番教室を借りて仮図書館が開始されました。昭和56(1981)年2月に図書館研究管理棟が竣工し、附属図書館が本格的に開館しました。

図書館情報大学附属図書館は、大学に設置された教育・研究支援施設としての役割に加え、次の役割を担うことが期待されていました。

- (1) 図書館情報学の教育、研究の場
- (2) 全国の図書館員の再教育の場
- (3) モデル図書館としての役割
- (4) 実験・実習の場

これらを実現するために、附属図書館に次の特殊施設が開設されました。

- (a) 図書館情報システム開発センター⁴⁾
- (b) メディア機器センター⁵⁾
- (c) 公開図書室^{6) 7)}

これらは、いずれも既に廃止されています。

なお、3つの特殊施設のうち、(c)公開図書室は図書館情報大学の大学公開事業として位置づけられ、平成2(1990)年4月につくば市立中央図書館が創設されるまで、地域住民によく利用されていました。成人部門と児童部門が設けられており、週3日の午後に開室されていました。貸出業務は、火曜日と木曜日は地域のボランティア、土曜日は学生ボランティアが担当していました。最も入館者が多かった昭和59(1984)年度の開館日数は145日、年間の入館者数は55,100人、1日平均の入館者数は380人でした⁸⁾。

先にあげた図書館情報大学附属図書館の役割のうち、(2)全国の図書館員の再教育の場について、昭和56(1981)年から毎年、大学図書館職員長期研修(以下、長期研修)と司書講習の開催を附属図書館が担当していました。

現在、筑波大学では司書講習を実施していませんが、長期研修は筑波大学附属図書館の情報管理課企画渉外係が業務を引き継ぎ、毎年夏に開催しています。今年、平成22(2010)年は7月5日(月)から7月16日(金)の2週間にわたり、情報メディアユニオンの2階メディアホールをメイン会場として開催しました。全国の大学図書館の中堅職員40名ほどが参加しました。筑波大学附属図書館のウェブページから講義資料が公開されています⁹⁾。

3. 施設

平成13(2001)年、情報メディアユニオンが竣工し、1階に当館のデジタルメディア部門が設けられました。同時に、従来の図書館がプリントメディア部門として改修され、当館の現在の姿が概ね整えられました。

筑波大学附属図書館は、1979年10月の中央図書館開館以来、開かれた図書館を掲げ、つくば研究学園都市の中核的な図書館として、学外者のサービスに力を入れてきました。図書館の資料の利用を希望される方は、附属図書館の各図書館を利用することができます。貴重書や一部の資料を除けば事前連絡は不要です。また、紹介状や身分証の

提示なども必要ありません。学外の方の当館の利用について、詳細は附属図書館のウェブページをご参照ください¹⁰⁾。

3.1 プリントメディア部門1階

写真1はプリントメディア部門入口、写真2はメインカウンター前からの様子です。プリントメディア部門は、教員や大学院生の研究室がある研究棟と、教室が並ぶ講義棟を結ぶ要(かなめ)の位置にあります。1階は図書館情報学分野の専門書と雑誌のフロアです。

他に、旧公開図書室の旧蔵書の一部などがある閲覧室Ⅱ、新聞や雑誌のブラウジングコーナー、視聴覚室、児童図書室、お話しルームがあります。閲覧室Ⅱにある旧公開図書室の旧蔵書は、公開図書室が閉室された平成2(1990)年以前の古い図書



写真1 プリントメディア部門入口

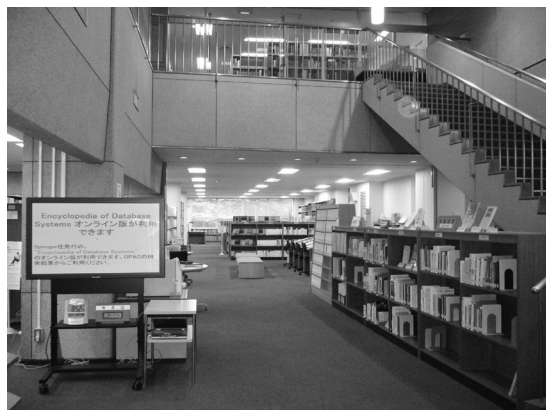


写真2 メインカウンター前

ですが、闘病記は医学・看護の医療関係の学生、小説やエッセイといった文芸書は教養の読み物などとして、よく利用されています。1階には、教員著作コーナー、学生用指定図書、図情図書館本学関係資料、一般教養図書などもあります。

筑波大学附属図書館では、原則として、全面開架方式をとっており、ほとんどの蔵書を書架から自由に手にとってご覧いただけます。とはいっても、増え続ける蔵書に対応し、書架を見やすく、利用しやすい状態に保つには、書架管理の作業が必要です。複本図書、紀要類のバックナンバーなど、利用が少ないものを選択して保存書庫に移動しています。

当館の資料の配架位置などは、当館のOPACでご確認いただけます¹¹⁾。なお、所在の表示が貴重書庫となっている資料の利用を希望される場合は、事前に当館のメインカウンター(029-859-1232)まで、平日の9時から17時の時間帯にご連絡ください。

3.2 プリントメディア部門2階

2階は図書館情報学分野以外の図書のフロアです。図書館情報学は、哲学、認知科学、社会学、教育学、統計学、言語学、文学といった様々な学問分野からのアプローチや研究手法が応用されるため、他の学問分野との関係が深いという特徴があります。当館では、NDC分類にもとづいて1階と2階に分けて図書を配架しており、1階だけでなく2階にも図書館情報学の学習や研究に欠かせない専門書があります。

2階の西側奥にある閲覧席は、大きな窓の外に豊かな緑が茂り、広々とした明るい空間が人気です。他方、南側のキャレルデスクに長時間陣取る利用者もいて、閲覧席の好みは千差万別ようです。

3.3 情報メディアユニオン

情報メディアユニオンの1階に設置されたデジタルメディア部門(写真3)は、開設当初からみると機能が縮小されており¹²⁾、現在は、メディアミ



写真3 デジタルメディア部門

ュージウム¹³⁾、貴重書庫、貴重書閲覧室、学習スペースがあります。メディアミュージアムは、当館の蔵書を中心に、一部複製や写真を展示して情報メディアの歴史を展望できるようにした常設展示を行なっています。図書館史をはじめ授業やオリエンテーションで利用されており、春日エリアを訪れる見学者にも好評です。

3.4 ラーニングコモンズ

2010年3月、プリントメディア部門の入口近くに、ラーニングコモンズがオープンしました¹⁴⁾。写真4は、ラーニングコモンズの様子です。ラーニングコモンズは、大学図書館の学習支援の機能を重視する最近の動きのなかで注目されています。コモン(Common)は“common sense(=常識)”のように、多くは複合語の形で用いられ、「共通



写真4 ラーニングコモンズ

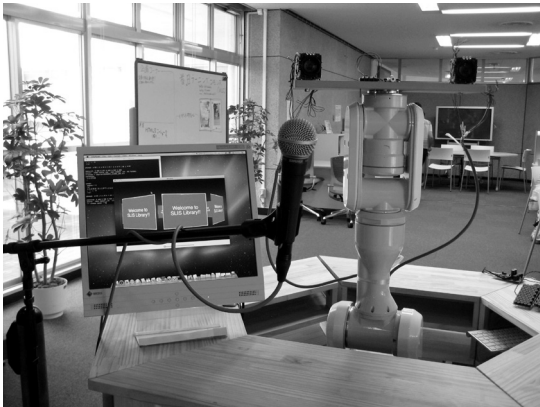


写真5 司書ロボット

の」という意味を表しますが、ラーニングコモンズのコモンズには、コミュニティに伝承されてきた知識や経験を伝えるという意味合いがあります。もともと図書館は、文献資料をとおして知識や経験の伝承を担ってきました。これに加え、今日の大学図書館では、人と人がリアルに出会う場としての機能が期待されるようになってきました。

当館のラーニングコモンズでは、知識情報・図書館学類のチュータデスクが置かれ、学習相談にあたっています。また、ミーティングテーブル、プラズマディスプレイ、ホワイトボードを自由に使って学生同士で議論を深めたり、プレゼンテーションの準備をしたりする場となっています。こうした音声によるコミュニケーションは、当然、従来の静寂な図書館とは相容れないわけですが、ラーニングコモンズを入口近くに配置するゾーニングにより、調べ物や読書を目的に来館する利用者との共存を図っています。

写真5は、最近、図書館入口に設置された司書ロボットです。司書ロボットは、今年度(H22年度)から附属図書館の研究開発室の研究テーマとなり、今後2年間にわたって、利用者とのコミュニケーションに関する基礎データが収集されることになっています。

4. 蔵書

4.1 資料整備計画

図1に、前身校を含む図書館情報学図書館の蔵

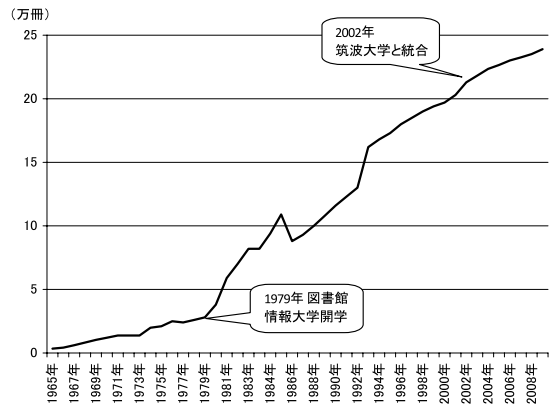


図1 前身校を含む図書館情報学図書館の蔵書冊数の変遷

書冊数の変遷を示しました。図書館情報大学が開学した1979年の翌年、1980年度の当館の蔵書冊数は38,000冊でした。このうち、33,000冊は図書館短期大学から管理換したものでした。筑波大学と統合した2002年の蔵書冊数は213,000冊ですので、図書館情報大学時代の22年の間で6.5倍に増加したことになります。

図書館情報大学では、開学当初から附属図書館の資料整備が重視され、図書館情報大学の開学当初、図書20万冊の蔵書整備計画が立てられました。各方面の協力を得て、昭和54(1979)年度からの第一次、昭和62(1987)年度からの第二次¹⁵⁾、平成9(1997)年度からの第三次と、資料整備計画が実施され、教員研究費等による高額図書の購入、寄贈により蔵書の充実が図られてきました。次にあげる選書方針のもとで、図書館情報学分野の専門図書館にふさわしい蔵書を目指して整備を行ってきました(下線は執筆者)¹⁶⁾。

- (1) あらゆる学問領域にわたる基礎知識と豊かな教養を培うための基礎的情報資料
- (2) 本学の専門領域であり、本学のコレクションの核をなす図書館情報学関係資料
- (3) 図書館の業務としての情報提供の基本的ツールであり、さらに学生や現職者教育のための実習・演習に不可欠な資料である参考図書資料
- (4) 本学の教育・研究の展開に直接関わる情報資

料

また、次のとおり文部科学省から大型コレクションの配分を受けました。

- (a) NTIS研究レポート：図書館情報学篇(昭和55年度)¹⁷⁾ ¹⁸⁾
- (b) ロシア・ソ連書誌・図書館学資料集成マイクロ資料(昭和56年度)¹⁹⁾ ²⁰⁾
- (c) 図書館情報学関係学位論文集成 1981-1985(昭和57、61、平成3年度)²¹⁾ ²²⁾
- (d) 英国図書館研究開発部レポート集成(昭和58年度)²³⁾
- (e) 印刷・製本・出版関係コレクション 1764-1982(昭和59年度)²⁴⁾
- (f) 百万塔陀羅尼(昭和60年度)²⁵⁾
- (g) アメリカ図書館学・書誌学基本文献集(平成元年度)²⁶⁾
- (h) シカゴ大学図書館情報学関係学位論文集成(平成3年度)²⁷⁾

現在は資料整備計画を終了していますが、これまで構築してきた図書館情報学関係の蔵書の規模と質を維持するために、図書館情報メディア研究科が基本図書費を毎年措置しており、図情サービス係も選書候補リストを作成して選書作業に協力しています。

4.2 図書

図2に、当館の蔵書のNDC10区分による分類

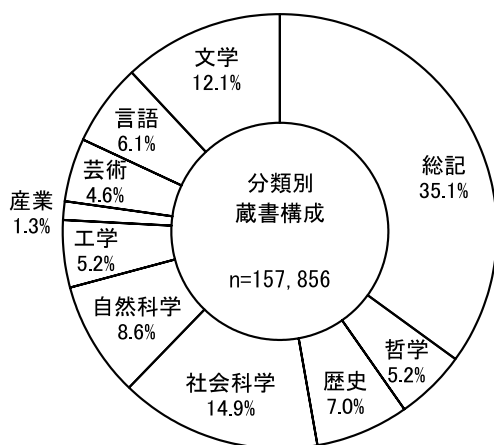


図2 分類別蔵書構成

別の蔵書構成を示しました²⁸⁾。図書館情報学を含む総記が35.1%、コンピュータ科学を含む工学が5.2%を占めています。これは、本稿4.1に示した選書方針のうち、「(2)図書館情報学関係資料」の収集によるものです。図書館情報学の学問領域は総合的であって関連領域が広いという特徴があります。また、選書方針の「(1)基礎的情報資料」として、主に春日エリアで学習する学生の学習に必要な図書も所蔵していますので、当館の蔵書の半分以上は、様々な分野に分類される図書からなっています。

4.3 雑誌

図3に、当館の雑誌受入タイトル数の変遷を示しました²⁹⁾。大学統合があった2002年までのデータですが、2000年の和洋合計2,801タイトルを境に、雑誌受入タイトル数が急激に減少しています。電子ジャーナルへの移行、資料購入費の逼迫などのため、今後も減少傾向が続くと考えられます。現在、当館で所蔵している雑誌の総タイトル数は3,590タイトルです。

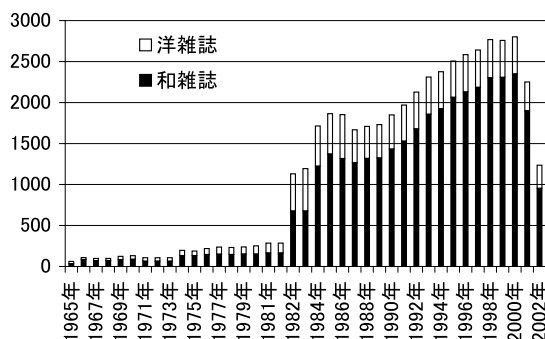


図3 雑誌受入タイトル数の変遷

4.4 参考図書

参考図書は、本稿4.1に示した選書方針の(3)に「学生や現職者教育のための実習・演習に不可欠な資料である」とあるとおり、当館の蔵書のなかでも重視されており、参考図書や二次資料などを多種類、しかも、旧版を含めて年代順に揃えています。『ブリタニカ百科事典』“Encyclopædia Britannica”は、初版から第15版まで全て揃っ

ています(貴重書庫など 033-B58)。また、パンクック(chez Pancoucke)の『系統的百科全書』“Encyclopédie méthodique, ou Par ordre de matières”を全巻揃いで所蔵しています(貴重書庫 035-E58)³⁰⁾。

5. おわりに

本稿をまとめるにあたり、諸先輩が残してきた記録を読み返し、図書館情報大学の出発にあたり、先駆的なモデル図書館たるべく、関係者一丸となって努力を重ねてきたことに感銘を受けました。現在の当館の職員四名全員が力を合わせ、図書館情報学図書館をよりよくするために微力を尽くしたいと存じます。この度は、貴重な紙面を割いて当館の紹介をさせていただく機会を賜り、ありがとうございました。

(きたに ようこ)

<参考文献>

- 1) 寺田光孝. 図書館情報大学八十年略史：前身校を中心にして. 図書館情報大学同窓会橘会八十年記念誌. 2002, p.7-57.
- 2) 宮原千千. 帝国図書館のころ. 図書館情報大学同窓会橘会八十年記念誌. 2002, p.102-103.
- 3) 図書館情報大学五年の歩み. 図書館情報大学庶務課, 1984.10
- 4) 小野実. 図書館情報システム開発センターの機能について. 図書館情報大学附属図書館報. 1 (2), 1985, p.3.
- 5) 郡司良夫. メディア機器センターについて. 図書館情報大学附属図書館報. 2 (1), 1986, p.3.
- 6) 山田高子. 公開図書室の紹介. 図書館情報大学附属図書館報. 1 (4), 1985, p.3.
- 7) 葉袋秀樹. 公開図書室の1365日. 図書館情報大学附属図書館報. 7 (1), 1991, p.4.
- 8) 附属図書館10年の歩み：年譜と統計. 図書館情報大学附属図書館報. 5 (3), 1989, p.6-7.
- 9) 筑波大学附属図書館. 大学図書館職員長期研修. <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/choken/>, (参照 2010-09-23).
- 10) 筑波大学附属図書館. 学外の方へ. <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/gakugai.php>, (参照 2010-09-23).
- 11) 筑波大学附属図書館. <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mytulips/>, (参照 2010-09-23).
- 12) 山本淳一. 附属図書館デジタルメディア部門について. 図書館情報大学附属図書館報. 17 (4), 2001, p.6.
- 13) 記録メディアの発達と図書館の変貌：図情メディアミュージアム常設展示. (prism_no13). 筑波大学附属図書館, 2010.3. http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/portal/prism/Prism_no13_web.pdf, (参照 2010-09-23).
- 14) 歳森敦. 筑波大学図書館情報学図書館でのラーニング・コモンズ誕生：教育との連携による小規模モデル. LISN, (144), 2010, p.1-5.
- 15) 藤川正信. 第二次資料収集計画について. 図書館情報大学附属図書館報. 3 (3), 1987, p.1-2.
- 16) 図書館情報大学自己評価委員会編. ULISの明日に向かって. 1995, 141p. 引用はp.58.
- 17) 図書館情報大学附属図書館編. NTIS研究レポートリスト(マイクロフィッシュ). 1982, 467p.
- 18) 風間勉. NTIS研究レポート：図書館情報学篇 1968-1976. 図書館雑誌. 77 (3). 1983, p.163-164.
- 19) 図書館情報大学附属図書館編. ロシア・ソ連書誌, 図書館学資料集成リスト(マイクロフィッシュ). 1982, 55p.
- 20) 郡司良夫. ロシア・ソ連 書誌、図書館学資料集成. 図書館雑誌. 77 (3). 1983, p.162-163.
- 21) 藤野幸雄. 図書館学学位論文集成. 図書館雑誌. 78 (1). 1984, p.45-46.
- 22) 板井賢二. 図書館情報学関係学位論文集成. 図書館情報大学附属図書館報. 9 (3), 1993, p.4.
- 23) 図書館情報大学附属図書館編. 英国図書館研究開発部レポート集成リスト：1965-1983.

- 1985, 55p.
- 24) 藤野幸雄. 昭和59年度購入大型コレクション「印刷・製本・出版関係コレクション1764-1982」. 図書館情報大学附属図書館報. 1 (2), 1985, p.4.
- 25) 高橋重臣. 昭和60年度大型コレクション百万塔陀羅尼. 図書館情報大学附属図書館報. 2 (2), 1986, p.4.
- 26) 図書館情報大学附属図書館編. アメリカ図書館学・書誌学基本文献集リスト. 1990, 1冊.
- 27) 図書館情報大学附属図書館編. シカゴ大学図書館情報学関係学位論文集成リスト. 1992, 16p.
- 28) 蔵書の点数は十区分の最初の数字で始まる分類を、OPACを用いて検索して調べました。したがって、書誌レコードの件数にもとづく構成比です。分冊刊行されているもの、複本がある場合、書誌レコードは1点と数えています。
- 29) 日本図書館協会. 日本の図書館の各年版. 総タイトル数はOPACを資料の種類を雑誌、所在を図情として検索して求めました。
- 30) 寺田光孝. パンクック「系統的百科全書」. 図書館情報大学附属図書館報. 18 (2), 2002, p.4.

開かれた大学の開かれた専門図書館—筑波大学図書館情報学図書館

気谷 陽子 (筑波大学附属図書館情報サービス課主任専門職員図書館情報学図書館担当)

筑波大学図書館情報学図書館は、筑波大学附属図書館に設けられている4つの専門図書館の一つであり、平成14(2002)年10月に、旧図書館情報大学が筑波大学と統合したことによって現在の形になった。筑波大学附属図書館は開館以来、開かれた図書館、集中管理、全面開架を特徴とし、中央図書館を含めて全館が同じ仕組みで運営されている。当館の蔵書は、主として旧図書館情報大学時代に、(1)基礎的情報資料、(2)図書館情報学関係資料、(3)参考図書資料、(4)教育・研究の展開に直接関わる情報資料、を収集することを選書方針に掲げ、第一次から第三次まで実施された資料整備計画および文部省から配分を受けた大型コレクションによって、図書館情報学分野の専門図書館にふさわしい蔵書を目指して整備された。